



Salamander  
in  
the circle

第十四章

ヤサカオ 立つ

峯村 明

# Salamander in the circle

## 登場人物

オモイカネ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者  
フツヌシ・・・・・・・・〃  
アマセオ・・・・・・・・世界の果ての島の王の兵士 シトリ族の者  
カガセオ・・・・・・・・アマセオの弟  
スクナ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者  
ヤサカオ・・・・・・・・アマセオの旧友  
ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父  
オマキ・・・・・・・・ホシナの妻  
ミツハ・・・・・・・・メッサナからの亡命者 メルノの偽名

## これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長  
ヒューダー・・・・・・・・〃 団員  
ヤスウ・・・・・・・・〃  
パウル・・・・・・・・ケストル王国・国王  
ウルリク・・・・・・・・〃 ・第三王子  
ヘンリク・・・・・・・・〃 ・ヘンリクの息子  
ソルド・・・・・・・・〃 ・警備隊長  
バイスロイ・・・・・・・・黄金門の皇帝の息子

パンテオラ・・・・・・・・メッサナ市の総督  
コモラ・・・・・・・・メッサナ総督の顧問  
バラム&バランケ・・双子のジャガー。パンテオラの部下  
キト・コマ・・・・・・・・ホシナ族の男たち  
マミヤ・・・・・・・・ホシナ族の娘  
イリチャ・・・・・・・・火の精霊  
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長  
ヘルガ・・・・・・・・〃・・・・王女  
コタエ・・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官  
サノヒコ・・・・・・・・島の王に仕える役人  
ハイヤーン・・・・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー  
ティコ・・・・・・・・〃・・・・科学者  
パルダリス・・・・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理  
メンドルプ・・・・・・・・メッサナの化学者  
ベネトナシュ・・・・・・・・死神  
ハマツ・・・・・・・・チドリの父  
チドリ・・・・・・・・アマセオの妻  
タマシギ・・・・・・・・ハマツの息子

## 目次

ヤサカオ 立つ

223.

224.

225.

226.

227.

228.

229.

230.

231.

232.

233.

234.

235.

236.

第十四章のあとがき

奥付

## ヤサカオ 立つ

223.

薄暮の泥の沼。有機物が腐敗する悪臭と生ぬるい空気。

夢だったのかうつだったのか定かではないが、既視感がある。

突き出た枯れ枝にとまり、あたりを睥睨する不吉なカラスの姿を、メルノは目にしたような気がする。おそらくたしかに見たのだろう、と思う。泥沼を脱出し、きれいな真水で身を清めた時、メルノはメルノではなくなっていた。メルノの意識のまま見ず知らずの娘、ミツハの身体を使っていたのだ。なにが起きたのかわからない。

ミツハの言うように、メルノの身体は沼でワニに喰われてしまったのかもしれない。

メッサナ市へ向かっていたネウトラ評議会のヤスウが見つめてくれなければ、あの泥沼で本当に落命していたかもしれなかった。そしてその宵、歌を歌おうとしたメルノは恐ろしい攻撃を受けた。その攻撃は、異変に気づいたヤスウをも巻き込もうとし、抵抗すらできなかったヤスウが身も蓋もなく助けを求めた相手がコタエであった。そしてコタエよりも距離的に近くにいたコタエの兄、スクナが駆けつけてきたのだった。

メッサナ市へ急行中だったヤスウは、危険にさらされているメルノの身柄をスクナに託した。そのおかげでメルノは世界の果ての島への亡命がかない、ミツハと名乗ることになったのだった。

ミツハを受け入れたホシナ族は事情を何も知らない。彼らは、ミツハは元から同族の者だったという暗示をスクナから受けていたからだが、それでもメルノにとってそこは

土地柄、風俗、人種、なにもかも異なっていたにも拘わらず、ごく自然に、彼らの中に溶け込むことができたのは、ミツハの外見や性質に彼らとの親和力があつたゆえだった。金髪碧眼で世界最先端の文化都市で育って学んだメルノではこうはいかなかったわ、と彼女自身、時おり振り返らずにいられなかった。

知らない土地、知らない人々との生活は、ミツハの中にいるメルノにものごとを考へる時間を与えなかった。ただ夢中で過ごしてきたメルノだった。

ところが――

## 224.

あの泥沼の夜の記憶が突如、戻ってきた。それは間違いなく彼女がメルノだった時の記憶だ。

宙に据えたうつろな目にはなにも映っていない。自分が石になってしまったような無感覚。この感じは――メッサナを逃げ出した時の屈辱と絶望――

その時、ふいに。

「水が足りないわ。あたし、川で汲んできます」

「ああすまないね。暗いから気をつけなね」

オマキの言葉にうなずき、ケガ人のために新鮮な水を求めに、ミツハは革の袋を手に天幕を出る。深夜の高地の空は恐ろしいほど空気が澄み、輝く星々は黒曜石の削りカスを空一面にぶちまけたかのような。その星明りで足元に影ができる。まったくの暗闇ではないのだ。

族長のホシナたちは夏の間、家族を引き連れてこの黒曜石鉱山のすぐ下にキャンプを設営している。地下水が湧き出した清冽な川が幾筋も流れ、高地であっても水にはこと欠かない。豊富な水がこぼこぼこぼこぼと音を立てて流れている。

「ここにはサンショウウオやサワガニがいる。あんまり腹の足しにはならねえけどな」誰かが、たぶんキトが、そう言っていたっけ。

(ミツハよ)

(——スクナさま!?)

225.

聞き覚えのあるスクナの声に、彼の姿を求めてきょろきょろとあたりを見回してみたが、生き物の気配はなかった。

(どうも、ごたごたしているようだな)

スクナはホシナの家でケガ人が運び込まれたことを知っているようだ。

(あ——はい……)

(運び込まれたアレは、アマセオの弟だ)

(そう——なのですね——『兄上』と呼んでおられましたっけ。でも、アマセオさまのご兄弟は亡くなられたのではなかったのですか?)

(うむ……赤子の時にたしかにな。だが、その御霊はタマシギという男に憑依した。兄のアマセオの力になるためにな。アマセオはそれを知らずに自分はひとりきりだと思っ込んでいたというわけだ)

(——なんてことでしょう)

(そなた、アマセオの実家がシトリという織物の総本家だということは聞いているだろう)

ミツハの眉がぴくりとした。私がそのことを知っている、この人はなぜ知っている？

(……スクナさまは、そんなことまでご存じなのですね)

(まあ、そなたを守るためだ、わるく思わんでもらいたい。して、アマセオの弟に靈感を吹き込まれたタマシギはシトリ一族の立場を盤石なものにするために奔走したはいいが、やがて暴走するに至った。簡単にいうと、提供の同意のない動物から体毛を大量に奪ったのだ。それは国禁である故、アマセオの弟は行為を糺そうとした。そこで、返り



討ちにあつて重症を負った。タマシギは予想外の力を身につけてしまったらしい)

ミツハはうなずいた。(体毛を大量に手に入れるためにたくさんの動物が……殺されたのでは)

(うむ)

(犠牲になった動物たちの苦痛と恨みの想念が、そのタマシギという人に集中していたはず)メルノはミツハが語るのを傍観者のように聴いた。

(それらの想念は、カラスの大好物なのです)

## 226.

(……何と言った、カラスの？ 大好物？)

(先ほど、アマセオさまの弟、カガセオさまが言っておられました。『タマシギには鳥が憑いている。それはカラスだった』と)

(———)

(スクナさま、私がかの地で助けていただいた時、最後まで私を追っていたのは、カラスでした。私は——カガセオさまの話から、それらは同一の波長をもっていると——)  
語尾が震え、消えた。

(ミツハよ！)

(……………)

呼ばれてミツハは声もなく顔をあげた。目の前にスクナが立っていた。

(そなた、そいつが何者か、知っているのか!?)

ミツハはスクナを見返し、唇だけを動かした。死神、と。

## 227.

水の入った革袋をかついで天幕に入ってきた男と目が合って、アマセオは絶句した。その容姿に見覚えがある。シトリー族の本家筋の男だ。しかし名前が思い出せない。拝跪すべきか知らんぷりすべきか。しかし、こんな時間にこんな場所にやってくるからには向こうもある程度の事情を知っているのだ気がついて、とりあえず、面を伏せて敬意だけは示しておく。

そんなアマセオをよそに、「まあ!! スクナさま!!」オマキが顔を輝かせる。  
「お久しゅうございます!!」

「む。オマキ、ホシナ、息災のようでなにより。夜分にご免」

「あらとんでもない。でもなぜ？」

「うむ。少々、話があつてな」スクナはそう言ってケガ人をはさんでアマセオと向き合う位置に腰を下ろした。

そうだ、スクナさまだ。本家タカミムスビー門の人々はおおかた政府の要職に就いて活躍しているが、そういったことを嫌って出奔同然の身で実家を無視している、あるいは放り出された、いずれにしても変わり者という評判の。

「カガセオよ。具合はどうか」

カガセオは眠っているのか、応えない。ミツハはオマキの傍らで膝をつく。

「アマセオよ」

「は」

「そなた、早急にここを離れよ」

「——何故——」

「タマシギがそなたを政府に訴えた。訴えを受け取ったのは、フツヌシ」

「フツヌシ！？ 軍部の！？ タマシギはいったいなんのつもりで！？」

「左大臣オモイカネを訪ねたらたまたま留守だった。それでフツヌシが受けたのだ。そなたが反乱を企んでいるという訴えを」

「は、反乱——なにをばかな——」

「うむ……そなたがホシナ族に入れ込んでいるという報告はかなり前からフツヌシのもとに入っていた。そなたも知っていようがホシナの土地は王の直轄地にして、ホシナ族はこの国の出身ではない。そしてそなたは王の兵士。入れ込みが過ぎると、何の口実にもされるかわからん」

「あの一何の口実にもされるの？」とオマキが口をはさむと、ホシナはぼそりと言った。

「取り除かれるということだ」

228.

「そういうことだろ。スクナどの」ホシナは腕組みをして重い口調で言い、スクナは目だけ動かしてホシナをちらりと見た。

「そおかあぁ！」

「なによ、どうしたのよ、おまえさん」

「いや」というホシナの声はいくぶん晴れ晴れとしている。彼は腕組みを解いて両手のひらを両ひざに置いた。

「黒曜石鉱山をこの島のあちこちに探し、増やし、望む者には我々の培ってきた技術を教える。さすがのワシも、大それた計画だと思っていた。だから恐れながらと、戦々恐々と、政府に願い出た。もつとも、最初に言い出したのはワシだ。向こうが食料源の窮状を切々と訴えてきたもんでな。それなら、我々が、と。そのあとは、おまえも知っ  
ての通り、とんとん拍子だ。むしろ、こっちが言い出すのを待っていたんではないか  
とふと思うくらいだった。そうなのだ、ワシらが言い出して、行動に移すのを待っていた  
んだ」

「え、でも、どうして——」

「さっきのスクナどののお言葉だ。何かの口実にしたいのだ」

「何かって？ まさか……」オマキはスクナを見、アマセオを見た。「まさか……あた

したちは……用済み……」

ホシナは静かに言った。「オマキ、でかい声出すな」「出してませんよ、呟いただけですよ」「うむ」

スクナが口を挟まなかったということは、挟む必要がなかったということだった。ミツハはそう理解し、思わぬ展開にただ目を瞠った。

「アマセオ、最初に、真っ先に言った。すぐにここを離れよ」

「いやしかし！！」

「フツヌシの軍はもう動き出しているのだ！　ぐずぐずしているところが戦場になる！！」

## 229.

「おのれ——タマシギ——」

カガセオは声を軋らせ、うめきながら起き上がった。

「ケガ人は起き上がっちゃダメ！！　寝てなさい！！」

「オマキどどの言うとおりのだ。カガセオ、お前は寝ている」

「しかし兄上！」

「とにかく……」アマセオは頬に不敵な笑みを浮かべて、ふん、と鼻を鳴らした。「おまえはここにいさせてもらえ。私は行く。行ってフツヌシに会い、誤解だと説明してくる」

ホシナもオマキも、ミツハもあぜんとした目でアマセオを見た。

「え、アマセオさま、話聞いてなかったの？ 誤解です、で済む話じゃないみたいなんだけど！ ねえちょっと！！」

オマキが止めるのも聞かず、さっと立ち上がったアマセオは、さっさと天幕を出て行ってしまった。別の天幕に囲ってあった馬のいななきが聞こえ、すぐに蹄の音が遠ざかって行った。あつという間の出来事だった。

「ねえスクナさま！ アマセオさまは大丈夫なの！？」

「大丈夫じゃあるまい。しかしなんとか時間を稼いでもらわねば。フツヌシの最終目的はここだからな。ホシナどの」

「そうだな。さて、夜逃げの準備にかかるか」

「はあ。なんてことだろうねえ」

「すまぬな、オマキどの」

「スクナさまが謝ることじゃないでしょ！ 実はあたしもね、ものごとが調子良く進んじゃうんで、なんか気持ちわるいなって思ってたの。族長は思い通りに進んでるわりに、なんか腹くくってるようなところがあったし。こりゃ、マミヤは帰ってこれなくて正

解だったってことかな」

「オマキさんよ」

「はい？」

「今、さいごに、なんと？」

「ん？ マミヤは帰ってこれなくて正解だったって」

「いやいやいや、マミヤは帰ってくるぞ、ただ、遅れてるだけだ——」

「ああ、スクナさま、あたしたちをがっかりさせたくなくて、そういうことにしたんでしょ？ ミツハちゃんのこともあるし」

「ええええっ！？ このスクナが三日三晩渾身の力を振り絞ってかけた超強力な暗示はっ——！？」

「あらっ、そうだったの？ ま、いいや。ところでミツハちゃんは何？」

「アマセオさまについて出て行った。たぶん見送りだろ」

\*

「アマセオさまっ！」ミツハは馬上のアマセオに叫んだ。「タマシギに気をつけて！」

「わかってる！！」それだけ応えてアマセオの馬は走り去った。

\*

「さあ、そなたも出立の準備を」

声をかけられ、ミツハはゆっくりと振り向いた。そしてスクナを見て首を横に振った。スクナは眉をひそめる。

「私は、参りません」

「なにを言っておる！」

「かの遠い土地からここまで連れてきていただいてすっかり忘れていましたが、私は『カラス』に追われていた身。ですからホシナのみなさんと共にいることはもう、できません。『カラス』がすぐそこまで来ているとわかった以上は……」

「だからなんだというのだ！」

スクナは叱責した。その声は低く強く、メルノが思わずびくっと身をすくませたほど力がこもっていた。

「おなごひとりですらどうするつもりか！ よいか、私はネウトラ評議会の人間からそなたの身柄を預かった。そなたの身はそなたひとりのものではないのだ！ 勝手な真似をしでもらっては困る！」

「……………」



「そなたはさっきこう言った。殺された動物たちの苦痛と恨みの想念こそがカラスを呼んだのだと。落ち着いて考えよ。カラスがとり憑いたのはタマシギだ。そなたではない。だいたい、ホシナの郷に苦痛や恨みがあるろうか？ ない！ そんなものは！」

「で、でも——」

「しっかりしろ」スクナは低く言った。

(しっかりしなさい。メルノ)

「心を強くもて。フツヌシの狙いはホシナで、タマシギの狙いはアマセオだ。そなたを狙うものはいない！」

## 230.

ヤサカオが本拠地とする八連山とは、山が八つ連なっているという意味ではなく、単に、たくさんの山、である。南北およそ25kmの間に20あまり連なる火山の集合体。その山麓は実に広大な扇状地である。

なにしろ地面から生えているのは丈の低い草だけ。視界を遮るものが何もないので見晴らしはひじょうに良好、そこはヤサカオの所有する馬の放牧場であった。

そのすこぶる見晴らしのいい扇状地の中腹で、ヤサカオは彼の馬たちを日がな一日眺める。ふと、彼の山ブドウ酒のような色の目がぎらりと光った。

牧場のはるか西を、馬が走っている。南から北の方へ向かって。

彼は手を動かして部下を呼んだ。すかさずやって来た部下に、彼の牧場の中を走り抜けようとしている馬を顎で指し、「先回りして捕まえてこい」と手ぶりした。

ほどなく部下は、闖入した馬を捕まえてきた。騎乗者付きで。ヤサカオの牧場を無断で横断しようとしたのは、フツヌシが放った斥候だった。

ヤサカオは斥候を締め上げる。ほどほどに。確実に派遣元に送り返して、この平和な地に武力が入ることは……たとえ通過であっても……きわめて危険だということを知らしめねばならないからだ。

「戻って親玉にそう伝えろ」、と、斥候を放り出してから、ヤサカオは考え込んだ。

(王の軍がホシナの地を？ なぜだ、あそこは王の直轄地ではないか？)

詳しく知りたかったが、締め上げたところで斥候は詳しい情報をもっていなかった。茶色と紫色が混ざったような不思議な色の目を不穏にぎらぎらさせ、ヤサカオは考え込んだ。しかし、考えるのはすぐにやめた。扇状地の西のルートが塞がれたとわかれば、フツヌシは別のルートをとるはずではないか！ そうだ、八連山の東側！ ヤサカオ一族の狩りと採取の場。彼の版図。西側の扇状地と違って、そっちは険しく深い山と谷。山を越えるルートは易しいのから難しいのまで無数にある。

ヤサカオは己の血が逆流するのを感じた。フツヌシの標的がホシナ族であったとしても、版図を侵略されるとまではいかなくても、断りもなく通過されるのは心外である。

(おのれフツヌシ！！ 若造め！！)

今でこそ広大な土地を眺めながらのんびりと馬を飼い、一族を養うために反対側の山地で狩猟採集に精をだすヤサカオだったが、彼自身もその祖先たちも、元は武人であった。元から血の気が多いのだ。こんなシチュエーションになれば、血が騒がないわけがなかった。

やおら、彼は立ち上がった。

ヤサカオが一族の者に緊急事態を宣言したのと、ホシナの地を駆け下りたアマセオが通過のあいさつにやって来たのが、同時だった。

231.

「フツヌシの標的はふたつ。ひとつはホシナ族。もうひとつは私だ」

「それでおぬしはフツヌシの軍を惑わすためにホシナ族を離れたわけか」

アマセオはうなずき、ヤサカオは不機嫌に鼻息を吹いた。

「おぬしは身内に注進されて逆賊扱い、して、ホシナ族はなぜ討たれねばならんだ？」

「……」アマセオは一時言い淀んで、思い切ったように口を開いた。「はめられた、ということのようだ」

「はめられた！？ 誰に！？」

「政府だ」

ヤサカオはいっしゅん、ぽかんと口を開け、脳内に「いったい誰のお陰で飢えずに済んでると思っとるんだ！！」の思いが爆発したが、それは置いておいて、目をぎらつかせた。

「ホシナ族はいつてみれば、よそ者だ。我々以上にな。昼間、フツヌシの手下がウチの牧場を通り抜けようとしたもんでな」

アマセオが、えっ、とヤサカオを見ると、相手はにっと笑った。

「すかさず停止させ、すみやかに、退出してもらった。まあ、ヤツが親分にどう報告したか知らんが。う〜ん……口実をやっちまったかもしれんな」

「口実って……」

「おぬしは知ってるかどうか知らんが、俺のご先祖は王と縁が近くて、今の政府と海に近いところで戦ったことがある。俺の親父が敗れた一族引き連れてこんな山の中にこっそり隠れ住み、政府は見て見ぬふりをしてくれたから、俺も若いころは政府に協力もした。政府にというより王の縁者としてできることはした。が……今度のことで、ウチも標的にされるかもな」

「……………」

「むう……国の組織が大きくなればなるほど、ものごとの見解も同じだけ出てくるわけだが……ホシナ族を排除したいというのは、わからんでもない」

「なに、どういうことだ？」

「おぬし、ホシナ族のホシナとはどういう意味か知ってるか？」

「金星に導かれる者」

「おお即答。その通り。ひるがえって、王の霊的祖先を遡ると北極星だという。そして、おぬしのシトリの本家タカミムスビは霊力の強い者が多く、王の側近を輩出している」

アマセオの脳裏にふとカガセオのことが浮かんだ。カガセオもまたたいへんな力を持っているのだ。

## 232.

「なあ、『我々は金星に導かれる』、と言ってはばからぬホシナ族とタカミムスビに連なるおぬしがくつつくことは……北極星を最高位に戴く者にとっては、おそるべき脅威なのだと思うぬか」

「……………」

「実はなあ……これは俺にとっても他人事ではなかったりする」

「……と、いうと？」

「俺の倅がな、以前、族長の娘を見染めちまってなあ。景気のいい、朗らかな娘で、倅はもう、ぞっこんさ。なんとかいっしょになりたいんだが、向こうは一人娘で、ありがたい話だが跡取りだから外へ出したくないと、族長はいう。しかし倅は諦められず、自分がそっちへ行こうと、つまりホシナ族を継ごうと言い出した。しかしホシナ族とウチとではいろいろ違うが、なにしろ仕事が違い過ぎる。それで、倅は先方に修業に入ったのだ。倅だけじゃなく、こっそり向こうへ行っちまったのも幾人かいるんだが、ホシナ族は鷹揚に受け入れてくれたよ。倅は仕事を覚え、順調にいつているように見えた。ところが。事件が起きた。

ホシナ族は黒曜石の採取と加工に関して厳密な契約を王本人と交わしている。黒曜石とは一族の命運もかかっている、神聖なものなのだ。その黒曜石製のナイフを、あろうことか、倅はホシナ族を訪れていた客人につきつけた。そしてその客人とマミヤを交換しようとしたらしい。まったく。正気を疑う。魔が差したとしか思えん。結局、倅はホシナ族ともみ合いになり、利き手の指を全部失くし、政庁に突き出された。

ことはホシナ族の存続にもつながる。その話を聞いて、俺は諦めた。倅の極刑もやむを得ん。ホシナ族と我々との関係もおしまいだ、と。

相当の時間がかかった末に、裁定が下った。倅は極刑を免れ、流刑、ホシナ族はお咎めなしだった。その知らせをホシナの族長自らが届けてくれた。俺は安堵に腰が抜ける思いだった。が、喜ぶわけにはいかなかった。倅が起こした騒ぎの最中に、マミヤが消えてしまったのだ。どこへ行ってしまったのかわからんという。ホシナの苦しみは終わってはいない」

「……………」

「倅が捕まった時、ホシナは一族の者だと通したらしい。ヤサカオの名は出さなかったのだ。族長はじめやつの一族は、うちの倅をよそ者だと思ったことは一時もない、と……、ゴンもホシナ族のひとりとして罰を受けたのだ、と……。

俺はその時、ヤサカオはホシナのために命をかけようと誓った。ホシナはげんな顔をしていたが、俺は本気だった」

ヤサカオは人差し指をアマセオにつきつけ、念を押すように言った。「むろん、今も本気だ」

## 233.

ホシナ族は人のいい人間の集まりだから、争いごとには慣れていない。政府の軍隊など目にしたら縮みあがってしまうに決まっている。ましてや、戦うなどもってのほかだ。

ヤサカオはそう見立てていた。

かつてホシナ族を破滅寸前のところまで追い込み、族長の娘の失踪にも嘔んでいるのが何を隠そう、彼の倅であったことは、ヤサカオ一世一代の大きな借りである。すべては無理でもいくらかでも返さなければ彼の気がすまない。もはや武器を携え戦う気満々であった。つまり、フツヌシの軍はヤサカオが迎え撃つというのだ。生まれつき血の気の多い彼はこういう話になると、血沸き肉躍るのだった。

血の気の多さは彼の一族の者たちも同じ。すでに身内が幾人もかの郷で世話になっているとあれば、ホシナ族の危機には当然のごとく血が燃えるのだった。彼らの危機は我が身の危機だったのだった。

ヤサカオには息子が18人いる。フツヌシの軍にもいないような、性格も体格も立派な若者たちである。彼らは末っ子のゴンがやらかした過ちをなんとか償いたいと、父と同じ気持ちであったから、父の命を受けて（喜び）勇んで八連山の東の山地へと散っていった。南からやってくるフツヌシの軍を待ち伏せ、北へ誘導するためである。息子たちは決めていた。戦場はアラフネ山だ。

ヤサカオ一族の慌ただしい動きは近隣に暮らす者たちへ伝播した。ふだんヤサカオの恩恵にあずかっているその者たちは次々と戦線に加わった。人だけではない。ヒグマの親子もオオカミの家族もモノノケの集団もいた。戦力は瞬く間に膨れ上がった。

思わぬ足止めにあつてフツヌシのこめかみにはびくびくと血管が浮き上がっている。槍や弓を持った物理的な相手はともかく、非物質のモノノケは彼のテリトリーの外だった。

「オモイカネどのはまだか！！　こういうやつらを退けるのが彼の役目だろうが！！  
それにしても、ええい、なんという忌々しい足止めだ！！」

「これは足止めなどではありません！！　将軍！！　もはや反乱です！！」

## 234.

ホシナ族はもともと家財道具など持たない上に、夏の仕事場の近くで天幕を張って寝泊まりしていたから、ひじょうに身軽だった。族長の一声で天幕を畳んで出発するだけである。なかには丹精込めたうると菜を惜しむ者もいたが、族長は言った。「案ずるな。あとは誰かが面倒をみにくる」

一族の移動の先頭をキトが、しんがりを族長が務める。族長はスクナの同行の訳をそれとなく尋ねた。

スクナは「ちょっとしたお守りだ、気にせんでくれ」としれっとして言った。  
(オモイカネのやつ、カガセオの逃亡を助けたのはアマセオと合流させるためだろう。もっとも、単に手を出せなかったというのもあるだろうが。ええい、つくづく食えんやつだ！！)

彼は確信していた。ホシナ族に事業拡大を仕向けたのはオモイカネだ。

(こういう陰険なことを考えるのはあいつしかおらんわ！　とはいえ——あいつがそう



せざるを得ないのもわからんでもない。シトリはタカミムスビの一派、オモイカネはその本流だ。フツヌシのように外部の人間からみれば支流も本流も関係ない。みんなタカミムスビだ。アマセオの行動にはタカミムスビの意図があると勘ぐられる可能性を、アマセオの坊やは考えとらんだろうなあ)

「スクナさん、なんかプリプリしてませんか？」

ふいに声をかけられて、はっと我に返るスクナである。「ああ、いやなに、なんでもない。ところで、オマキどの、そなたらの娘ごのことなんだが」

「マミヤのこと？」

「うむ、実は、私はマミヤに逢ったのだ」

「——ほんとうですか！？ え！ いつ！？ どこで！？」

「少し前のことだ。場所は……遠いところだ。ケストル、エウメロス両王国の国境地帯」

「よくわかんないけど、遠いところなんだということはわかりますよ。ああマミヤはそんなところに！！」

「信じられんかもしれんが、マミヤはダイドラボッチと一緒にいた。そうだ、あのダイドラボッチだ。マミヤはダイドラボッチをくにへ帰してやってくれと私に言った。だからダイドラボッチは帰ってきたのだ」

「それで——娘は——」

「マミヤの帰国は王が止めたことなのだ。ダイダラボッチのように私の一存ではどうにもならなかった。それでそなたらに暗示をかけた。すまぬ。このとおりだ」

「いえ——いえ——スクナさま、そんな頭なんかさげないでくださいよ！！ 娘が帰ってこれないのには、きつとなにか訳があるんですよ——」

「——娘は——」、とホシナはつぶやいた。

## 235.

「娘は、そのあと、どうしたのだろう」

「娘ごは帰れないと知って、南へ向かった。南へ向かうしかなかったのだが、そこに想い人がいるようだった」

「想い人って……男……？」、とオマキ。

「ヒューダーどのではないか？」、とホシナ。

「そうだ、そういう名だった。なぜわかったのだ、ホシナ」

「いや……オマキは気づかなかったのか、娘があつ男をえらく気にしていたのを。あつ男が外国人だということを差し引いても、ゴンに対する態度とはまるっきり違っていた。あつ男がホシナ族を継ぐなどあり得ないが、娘があつ男についていくことは大いにあり得るだろうとワシは思った。もしも翼があれば、地の果てまでも追いかけていくだろうと」

「なにしろ」オマキはぼつりと言った。「いいおとこだったもんね」「おまえもそう思うか」「うん」「——ワシよりもか」「あらやだなに言ってんのおまえさんたら」

そしてホシナは、自分がヒューダーに告げた言葉を思い出していた。

「ホシナの祖先はずっと昔、ずっと北からやって来た。長い旅の中で、ある時、ひとりの幼子に神託がくだった。曰く、『ホシナ族は南の地にて黒い高貴の石を養う役割を担う。心せよ。其はかの地にとどまらず』。

「この国の王から賜った黒曜石の鉱山は、祖先らにとってまさに南の地、神託の通りのことが起こったのだ。我々は見守られている、一族の者が畏敬の念に打たれたのは言うまでもない。しかし神託には続きがある。心せよと。其はかの地にとどまらん、と。わしは、さらに南へと送られたゴンのことを言っているのではなかろうかと思った。だが——違うかもしれん。ゴンをさすのではないかもしれん。長い歴史の中、ホシナ族から離れた者は、そう多くない。わしの知る限り、ゴンのほかにもうひとりいる——」

## 236.

ホシナ夫妻が娘に想いを馳せているとき、スクナはミツハをつかまえて尋ねた。

「ミツハよ、つかぬことを聞くが、そなた、きょうだいがおらぬか？」

「え」なにをいきなり、と思いつつ、メルノの意識は考える。「年の離れた姉が3人」  
「どれくらい離れている？」「いちばん近い姉とは18。よく親子と間違われました」

「……そうなのか？ いや、マミヤのことを思い出していて、もうひとつ思い出したのだ。私はあの時、そなたによく似た者に逢った。少年だった」

「はあ……」

「久しぶりにそなたの顔を見て、どうも、もやもやしていた。そうだ、あの少年に似ているのだ！ ふたごかというくらい似ている！」

ミツハのげげんな顔をよそに、スクナは勢い込んで言った。

「まあ、その少年はウサギのように髪は真っ白で瞳は赤かった。顔立ちといい体つきといい、本当によく似ている！ そうか……他人の空似というやつか。私は目の前で見せてもらったんだが、その少年は、竜だった」

えっ、とミツハはスクナを見上げた。「竜ですって……？」

「うむ、翼ある竜だ。ひじょうに大きく、純白の身体がひじょうに美しかった。彼は私の目の前で人間の姿から翼竜の姿へと変身した。彼がマミヤを南へといざなった」

「その……少年の名は、なんと……？」

「それがな、彼は名前を持っていなかった。それでヒューダーが付けたのだそうだ。イリチャという名を」

第十四章 『ヤサカオ 立つ』

第十五章へ続く

## 第十四章のあとがき

長野と群馬の県境にある荒船山、そのてっぺんに『皇朝最古修武之地』と刻まれた石碑が立っています。

案内板には、石碑は昭和初期に建てられたもので、この文字の謂れは、

『信州のタケミナカタが、寒さが厳しく海もない信州では、天照大神の命による「野菜、魚以外は殺生して食してはならない」では生きていけない。そこで猿、鹿を食してよいかと尋ねたところ、「ならぬ」という返事だった。

そこでタケミナカタは温暖な平地で、海にも出られる関東の地へ領土を拡大するべく戦の準備を始めた。

このことを知ったフツヌシとタケミカツチは迎え撃つためにこの地に赴き陣を構えた。名だたる軍神たちの争いを懸念した天照大神は孫であるニニキネをこの地へ使わせ、3神の和議を結ばせた』

という、言い伝えを記したもののなのだそう。

群馬側ではフツヌシとタケミナカタとの戦いで千曲川の水が七日間血に染まったされ、また長野側ではタケミナカタはタケミカツチとの力比べに敗れて諏訪湖に逃れ、この地から出ないと誓ったと伝えられています。

えー。

筆者minemuraは荒船山てっぺんの石碑は知ってたものの、この案内板のこと…石碑の謂れ…知らなくて、あとがき書いて初めて知りました。大汗

案内板に書かれてることの前半分はホツマツタエ15文そのままです。もっともホツマのアマテルはタケミナカタに「ならぬ」と言ったあと、いろいろ提案しています。それだけ鳥獣食をさせたくなかったのですね。

さて、本編のホシナ族はまったくのフィクションですが、ヤサカオはですね、一説にタケミナカタがスワに入ろうとしたとき一戦交えたという実在(?)の人物です。タケミナカタの後ヤサカトメ姫はこの人の娘だとか。まあ、あくまで一説です。

2022年12月25日記

## 奥付

Salamander in the circle

第十四章 ヤサカオ 立つ

2022年12月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

ブログ [世界の果ての島より](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---